

平成 28 年 5 月 12 日現在

機関番号：34310

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720138

研究課題名(和文) 中世ヨーロッパにおける超自然現象の認識：中世後期の英文学を中心に

研究課題名(英文) Understanding the Supernatural in Medieval Europe (with special reference to late-medieval English literature)

研究代表者

大沼 由布 (ONUMA, Yu)

同志社大学・文学部・准教授

研究者番号：10546667

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：イングランドを中心とした、中世ヨーロッパの様々な言語やジャンルの作品における超自然現象の記述にあたり、当時の人々が、古代からの知識に基づきつつ、自分たちの理解の範疇外にある出来事をいかに記述し受容してきたかを分析した。不可思議な物事を語る際には、様々な語り的手法や工夫があり、何を主眼とするかによる記述の変化も見られた。古代からの知識の継承に従い、情報が複雑化して発展していく様子がわかり、当時の知的活動の一端が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This project investigates various kinds of medieval texts written in several European languages, including English, with the purpose of analyzing how the supernatural is received, described, and understood, often within a framework derived from classical (i.e., Greek and Roman) literature. It turned out that when people in the medieval period wrote about what was unknown and strange to them, they devised diverse methods of narration for the purpose; literary variations often occur, reflecting emphases favored by this or that author. Information about, and knowledge of, the supernatural grew out of cultural inheritances from the classical period, a fact which tells us much about intellectual activity in the late Middle Ages.

研究分野：中世英文学

キーワード：中世英文学 西洋古典 古典の受容 英米文学 驚異 旅行記 博物学 百科事典

1. 研究開始当初の背景

研究代表者の主な関心は西洋古典の中世文学での受容にあり、平成 22~23 年度には、「中世後期の英文学における記述法としての「驚異」と古典受容」との課題名で、科学研究費の助成を受けた。ここでは、14 世紀の架空の旅行記『マンデヴィルの旅行記』や、「驚異」についての分析を含む 12 世紀の著作、ティルベリのゲルウァシウスの『皇帝の閑暇』を中心に、記述される対象としてではなく、記述方法としての驚異、という視点から、古代から中世にわたり、驚異がどのように描かれ、どのような部分に変化が見られるかを分析した。その過程で、新たな発見があり、本研究の着想に至った。

そもそも中世文学にとって、古典文学・文明とは、依って立つべき偉大な規範として存在しており、従来は一般に古典の方が優れており、中世文学はそれを模倣したもの、という図式で理解されてきた。ところが、研究代表者が驚異についての記述を調べていく際に、古典に基づきながらも、中世の方が優れた点を持っているのではないか、という事に気づいた。具体的には、古典時代は驚異を絶対的なものとして捉え、東洋は常に異なるものとして描かれているのに対して、中世文学では、驚異とは見る人により異なるものであり、西洋人にとって驚異である東洋が、東洋の人間には驚異ではなく、かえって西洋の方が驚異になる、という、相対化の視点が現れていた。これは、古典時代には見られなかった事であり、中世人のメンタリティーの柔軟性、先進性を表していると考えられる。

さらに、魔術と機械仕掛けの人形についての中世人の考え方についての発表を平成 23 年に行なったが、その際、驚異に対する認識との類似点も見られ、中世人の認識という問題について、驚異に限らず、広く超自然現象がどう捉えられていたかをより深く追求し、神学や科学といった問題も視野に入れなが

ら研究を行う必要があると感じた。

なお、他者の表象、というテーマは西洋文化に深く関わるテーマであるが、中世文学、特に旅行記の分野でも、注目されているテーマであり、1990 年代から 2000 年代にかけて出版された当該分野の重要な研究書は、多かれ少なかれこの問題を扱っている。そういった研究書の中で、中世では、他者、つまり東洋への柔軟な姿勢が見える事が指摘されているため、それらと連動させ、学問体系にも変化が見えてくる 12 世紀から 15 世紀に至る人々の精神性を明らかにしたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、ヨーロッパ中世の人々が、西洋古典の影響を受けつつ、自分たちの理解の範疇にある出来事をいかに記述してきたかを分析し、そこから当時の人々の認識や精神性を解明しようとするものである。具体的には、以下のテーマを探求する。

- (1) 古典古代より東洋は驚異にあふれた国とされているが、12 世紀になると、西洋にも驚異が存在するとの記述が出てくる。そういった西洋の驚異を調べ、相対的な認識を明示する。
- (2) スコラ学者たちの著作をとりあげ、超自然現象の捉え方等の当時の知識人の心性を浮かび上がらせる。
- (3) 魔術と科学との関わりから、超自然と人為との認識を明らかにする。

これらを通して、従来、後進文化と見られてきたヨーロッパ中世を、それが範としてきた古典古代より優れたものとして位置づける事を目的とする。これが立証されれば、古典時代に形成されたいわゆるオリエンタリズム的な思想から、中世時代は既に脱却しつつあった事となる。そうなれば、ある意味では、古代のみならず、近世よりも、中世社会の方が柔軟な考えを見せていたとも言え、中世という時代を一から見直す事になるといえる。

3. 研究の方法

本研究は、12世紀から15世紀のヨーロッパの人々が、超自然現象を、西洋古典の影響を受けつつも、いかに自分たちなりに記述し、理解してきたかを分析し、当時の人々の知覚・認識・心性といった問題に迫るものである。

驚異については、12世紀以降のヨーロッパで新たに登場してきた、自分たちのうちにある驚異、すなわち「西洋の驚異」について取り上げ、東洋の驚異との相違点を明らかにする。

スコラ学については、特に認識や超自然と関係があるもののみを取り上げ、中世後期の知識人の思想的枠組みを理解する助けとする。

魔術と科学との関わりについては、風車や機械人形など、人間の技術が、従来超自然と考えられてきた領域に到達するようになってきた13世紀から、中世の終わりである15世紀までを中心とし、そういった機械に対する人々の理解について分析する。

4. 研究成果

平成24年度は、超自然現象の中でも、「驚異」がどのように認識されていたかを中心に調べた。また、「驚異」の一例として、アマゾン女族を取り上げ、そのイメージが古代から中世にかけてどのように変化し、中世の驚異認識の一端をどのように示しているかを、他者との接触による知識や認識の形成という点と絡めて分析し、国際学会で発表した。学術的な意義や重要性としては、研究が進んでいないアマゾン女族の中世でのイメージを紹介した事や、時間的・地理的他者双方の影響を考慮にいれた事があげられるが、それ以外に実践面として、成果を主に理系の研究者の前で発表したため、専門用語を避け、なるべく万人に分かるようまとめた事で、限られた範囲だけに開かれがちな研究を、より多くの者へ発信していける道が開けた事も挙げられ

る。さらにこれを発展させ、「幻想」という面を意識して分析を進めた結果が平成26年に論文集の一部として出版された。そこでは、他者であるアマゾン族を、自らと比べどのように描写するか、という点が、古典時代に比べ中世では多様化していることがわかった。自らの理解の範囲外の存在を、疎外する方向で進む場合や、取り入れる方向で進む場合、相対的に捉える場合などがあり、十字軍など、現実世界での歴史的要素も影響している事が窺えた。研究者だけでなく、一般読者をも対象にした書籍に収録されたため、より幅広い層へ研究成果を還元することができたといえる。

それ以外に、12世紀の地誌を取り上げ、一見驚異に対して相対的な視点をもっているかのような記述が含まれるが、実際には自分達の優位性を示すためにそのように記述していると指摘した発表を国際学会で行った。これにより、同様の記述でも、作品全体の文脈により、大きく意図が異なる事を示し、今後の驚異研究の注意点を示す事ができた。この発表に基づいた論文は、ベルギーの出版社から平成28年中に刊行予定の論文集に、収録が決定している。

また、分担研究者として参加した驚異譚に関するプロジェクトのために、旅行記についてと百科事典についてと、二回の発表を行った。旅行記についての発表は、平成24年度から25年度にかけて、『マンデヴィルの旅行記』が、「驚異」を語る際の工夫としていかなる語り手像を作り上げたかについての論文にまとめた。

平成25年度は、『マンデヴィルの旅行記』の複数ある版のうち、これまでほとんど注目されてこなかった二つの版を取り上げ、主流となっている版と比べてどのような変化が起こっているかを論じた。その中で、驚異の語り方や他者への態度、という点も注目した。取り上げた二つの版は、全体的にキリスト教

道徳観の濃い記述となっており、超自然現象の理解の一つに、それを神がなした業とし解決を図ろうとするアプローチがあった事が認められた。その意義と重要性とは、これまで注目されてこなかった作品を含む多くの作品を取り上げ、広い視野の中で、超自然現象の認識の具体例を示し、中世人の精神性の一端を具体的な記述から明らかにした事にある。

平成 26 年度の主な研究対象は、*Wonders of the East* と呼ばれる古英語及びラテン語の散文である。この作品は、現存する写本 3 点全てにおいて、豊富に挿絵がつけられているのが特徴であり、美術史的側面から取り上げられる事はあっても、従来文学として取り上げられる事は少なかった。国際学会で発表を行い、この文献が、超自然現象を当時の人が理解するための一助として、現在でいう図鑑のような役割を果たすものとして編纂された可能性を、現存する写本および先行文献との比較により論じた。この発表を基に執筆した論文は、平成 27 年に学術雑誌に掲載された。従来注目されることの少なかったこの作品の新たな役割を論じ、当時の人々の超自然現象の受け取り方の一考察としたことに異議及び重要性が認められる。

平成 27 年度は、分担研究者として参加していたプロジェクトの成果をまとめた著作が出版され、そこへ二本の論文が掲載された。一点目は超自然現象の代表例としての驚異と旅行記との関わりについて分析し、二点目は超自然現象の具体例として、東洋に生息するとされていた怪物蟻のイメージの変遷を追った。特に怪物蟻は一般にあまり知られていなかったため、一般読者からの反響が大きく、古典の知識の継承の形を学界のみならず、一般読者まで広められた。著作全体も類書のない独自性の高いものではないかと高く評価された。

学会発表では、本研究で取り上げる重要作

品の一つである『マンデヴィルの旅行記』を、当時の英仏の関係という歴史的な脈から読み解き、作品の中にイングランドの国民意識の芽生えが見られることを示した。超自然現象を語る際に重要な辺縁を相対的に捉える考えは、伝統的に世界の辺縁に位置するとされてきたイングランドの見直しと繋がるため、作品中で重要な役割を果たしたといえる。これは、『マンデヴィルの旅行記』研究の新たな知見ともなると考えられる。

最後に、古代中世の動物譚における鷲とフェニックスのイメージの変遷についての論文を執筆し、平成 28 年の出版が決定している。鷲の記述には、従来古典由来ではないとされてきた記述が含まれているが、執筆過程で行なった調査により、それを覆す発見があったため、更に調査を進め、その部分を中心として、英語論文にもまとめたいと考えている。

以上のように、超自然現象を分析してきた結果、荒唐無稽と思われるような事象・現象が、それとは対極にあるかのように思われる科学的記述と、近代科学へ発展する前には、近しいものといえることに着目するに至った。また、魔術と科学との関わりやスコラ哲学については、まだ分析が不十分であるとの反省があるが、その点も含め、今後は、博物誌や百科全書を取りあげ、その分析により、当時の総合知のあり方を示したいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

Yu Onuma, *Wonders of the East and Natural History, Poetica: An International Journal of Linguistic-Literary Studies*, 査読有、Vol. 83, 2015, pp. 19-36

大沼由布、『マンデヴィルの旅行記』と「装置」としての語り手、同志社大学英語英文学

研究、査読有、Vol. 91, 2013, pp. 1-18,
<https://doors.doshisha.ac.jp/duar/repository/ir/16071/020000910001.pdf>

大沼由布、二つの韻文版『マンデヴィルの旅行記』における散文版からの変化、主流、査読有、Vol. 75, 2013, pp. 25-47

〔学会発表〕(計6件)

大沼由布、英仏版 *Mandeville's Travels* とイングランド像、日本英文学会第87回全国大会シンポジウム「中世イングランド文学におけるフランス 文学圏の共有と差異化」、2015年5月23日、立正大学品川キャンパス(東京都品川区)

Yu Onuma, *Wonders of the East and Natural History, Old and Middle English Studies: Texts and Sources*, 2014年9月3日、ロンドン(イギリス)

大沼由布、知識の集約と編纂：ヴァンサン・ド・ボーヴェの『大いなる鏡』(原稿代読による)、「驚異譚にみる文化交流の諸相 中東・ヨーロッパを中心に」共同研究会、2012年12月9日、国立民族学博物館(大阪府吹田市)

Yu Onuma, *Convention Through Innovation: Marvels in Topographia Hibernica by Gerald of Wales, Aspetti del meraviglioso nelle letterature medievali / Aspects of the Marvelous in Medieval Literatures*, 2012年11月19日、ラクイラ(イタリア)

Yu Onuma, *Literary Migration of the Amazons through Contact Zones*, 第9回日独先端科学シンポジウム(JGFoS)、2012年10月26日、ポツダム(ドイツ)

大沼由布、『マンデヴィルの旅行記』と「見る」ことの権威、「驚異譚にみる文化交流の諸相 中東・ヨーロッパを中心に」共同研究会、2012年5月26日、国立民族学博物館(大阪府吹田市)

〔図書〕(計3件)

大沼由布、甦る鳥たち 古代中世ヨーロッパにおける鷲とフェニックスの描写、下楠昌哉・東雅夫編、*幻想と怪奇の英文学2 - 増殖進化編*、春風社、2016、印刷中

大沼由布、ヨーロッパ中世の東方旅行記と驚異、東方の驚異 ヨーロッパにおける巨大蟻の記述の変遷、山中由里子編、<驚異>の文化史 中東とヨーロッパを中心に、名古屋大学出版会、2015, pp. 95-112, 220-236

大沼由布、幻想のアマゾン族、下楠昌哉・東雅夫編、*幻想と怪奇の英文学*、春風社、2014, pp. 82-108

〔その他〕

所属機関ホームページ

https://kenkyudb.doshisha.ac.jp/rd/html/japanese/researchersHtml/109017/109017_Researcher.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大沼 由布 (ONUMA, Yu)

同志社大学・文学部・准教授

研究者番号：10546667